



## 里山の生態系変化の中での菌類

大阪市立自然史博物館 主任学芸員

佐久間 大輔 (さくま だいすけ)

菌類は周囲の生き物と密接な関係を持って暮らしています。菌根共生、落ち葉や枯れた幹を分解するなど、特に植物とは深い関係を持っています。日本の森林とりわけ私達の身の回りの里山はこの1世紀程の間に大きな変化を見せています。この講演では里山の変化に菌類の変化を重ねて眺めてみたいと思います。

江戸末期、大阪の町で人々が生活をするための燃料は周囲の山々ではまかないきれず、広く瀬戸内の各地から供給されていました。明治から大正にかけてその傾向はますます拡大し、西日本の山の木々は伐採され薪炭として売られていました。はげ山に近い景観が広がる中でアカマツは火力も強く、材の価値も高かったためにかろうじて維持されていました。その結果アカマツと共生し、はげ山に近い環境で生育するマツタケやコウタケなどのきのこが身近な存在となり、大量に発生し利用されてきたのです。ハツタケ、ヌメリイグチなどの若いアカマツ林のきのこ、ショウゲンジやネズミタケなどのナラ林のキノコも同様に人が利用する里山景観のキノコです。

戦後、プロパンガスの普及が森を大きく変えました。大阪周辺では昭和38年頃のことです。薪は販路を失い、定期的に切られ続けていた里山のナラやクヌギは収穫されることなく大きく育ちました。建築材の主役が規格化された杉や檜へとかわり、アカマツも伐採されず大きくなりました。こうして、はげ山に近い状態であった近畿の里山はゆっくりと木々に覆われました。その結果、林の下には厚い落葉層が形成され、落葉

の中に住むキノコが増えてきました。落葉分解菌だけではなく、ベニタケの仲間も落葉の間に伸びる根と共生し、数を増しました。

しかし、太くなった木は病虫害にかかりやすくなります。マツノザイセンチュウにより一斉にアカマツが枯れると松の枯れ木に生えるヒトクチタケやチャツムタケは増えましたが、マツタケ山のキノコは大きく数を減らしていきます。更に最近では大きく育ったミズナラやコナラ、クヌギを枯らす「ナラ枯れ」も広がり始めました。マイタケなど枯れ木に生える食用菌が増える一方、これまでは殆ど見られなかったカエントケも増加しています。里山の変化は、菌類の種類や量にも大きな影響を与えています。地表にたまる腐植や倒木、共生する樹木の種類など様々なことが関係しています。菌類のレッドデータブックや、野生きのこの採集、毒きのこの中毒対策などに関係していきます。



里山の放棄に伴ってすっかり数を減らした松林のきのこ。マツタケはその代表格 (大阪府産)



近年急増している毒きのこカエントケ (京都府産)

### PROFILE



佐久間 大輔 (さくま だいすけ)

神奈川県出身。外生菌根研究から菌類に。博物館に職を得て、菌類全般の生物多様性に取り組む。また、里山の保全研究にも長く取り組んでいる。